新沙石集

五

へ13
526
5

へ 13
526

へ波10
526

新選沙石集 第五目録

比丘尼感若し桂子の話しそうぶる事
元食乃尼草家と設て清水寺に参詣のる事
賊比丘尼をうばい、ものを
魏影法師士こうりん伝作の法力
若狭国のもくめ一しゃくに成まどろぶる
尸毘大王鳩にかわりたまふる事
山伏姫路の立山にて元母云婚ちて
元食沙つの事
奉とうる女図まの所とるる事

西麓寺章忠の園梨子ゝ[illegible]
故侯の傳教記のくぞんを地蔵に[illegible]
言光の[illegible]ん世の[illegible]
故[illegible]ふ国の法印国栄のぐ[illegible]
和州[illegible]の貪[illegible]法[illegible]牙歯[illegible]茶[illegible]

法印傳感者[illegible]の地[illegible]事

麿弁別[illegible]びくわら傳感[illegible]数細[illegible]
く[illegible]麿のき[illegible]うぐいと[illegible]
て九[illegible]の神剣[illegible]
法[illegible]
[illegible]傳感が[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

又黄とみるに海こしに分脈しおくうどそづ
さいりなくむそのいちの西方へさてびはくふ
極楽の池にいるそのの時一体二ぢうの八万四千
乃相好聖とちしてりかやき四十二位の摩
羅と寿紙それく鶏くそう清蓮のまつのを
わるそれしけ母果乃賀うりく清威代
嘆しそつぐくのこ極にいるる海ちもく安海にりく
らくの蓮にいるる海ちもく安海にりく
毎日四十八巻と備ちに二千回の拝ちに二万回り
地に生ぜへしと黄さりて説けぐく嘆ぶし三
年して頭に九重の蓮花わり流水へ鶏くこと

ぐ。ちぐどかちぐ生に来ぐてちりち上京拝
生とちぐに元食の花軍衣とはて清水寺ふを加ける
れ物に中に我文仕人清れちふさんちわら居
の前小名向くにくちぐ嘴くそる前の
くそ羽代第に仏ちる蓮そる西乃歌の乃
浪のくくりの巻花れけのぐく疫地ちる
そる寿りく物元わりくちり神社月十四余乃
るりやれそるかぐ一きまづにかに
けて白き蓮とそちりけ生らみる人
元とわぐしきく義とちる

[illegible]おきをしらせ給へ[illegible]衣おりけるとぎ
ひさしくわれでたあるりと巻へ物れそるとと結へ
みのもろ衣とふられとといへどきしやとぞ咲ける
はて[illegible]の女性を氏わられてぐるあなんど
そしをそれぐちくるあくやでをへりけるとを女性
りてぐ男ひろんでびへして軍と一つをしをせくぞ
へをを尼ろろもんでされはそをりてあんと
ろふ程を同じ寺を加をしゆををく
ををろをと語く
彼岸をもきをるれをるわをとぐ。
をてはく尼れうをりをれを

をいをいろをきをめの跡をて山歌と書付りく
軍家と為をくいづちをるくられをそら
賊法位と結ら事
ひを夫笠を拍賊の法をわりを為とゆくるはら
をらをるて賊へ行わをく物の門おといををぐを
をそば僧とををへて結らけんをしけるぶ那系れる
られを軍の望をゆひけをををらををそぐ
遊ふをるは僧やぐてひをきけくあげめへをるいや
をけを色ぐを蛮へ木西をくをぐりぬと云り我疫と
行つを戸羅の池行ををへ又部十重服用をを求
又の浮壽へ四十八種と皮肉とををへぐら紙へ

くてハ香らん華葉一つ〳〵にもきくしてハ我を
あづかる如くしとくいくとなく修しゆるに
けるその古の帝ま行幸ありけるに途ぐまの
びくと御覧じてちやしきて何ぞとわるのに右
の子細をし申ければしこくしてさりとく
御めしてたん公の上にまうらして草の葉
を縁ゆるされ候ばとりく我蔵の僧ににと
せらるや

魏甄慶居士観音經の徳の事

盧魏の國の居士に甄慶といふ者ありしが少年
のころより信心ありてくわんおんに帰依

しくわんをんの尊像をつくり安置し常住に
恭敬をいたし多年信心のちからよりまもりのか
に後事ふかくありまうちらるれば宝貨かれに
も若か間せし悪難の事をうけて明日市にゆき
りくべきとされと夢にその座へくわんをん經称念
あれば沙門夢中にきたりて告ていはく汝観音
經一千巻をよみてまつれと夢さめて教のごとく
官使わが身をひいて市に行路の村人わか
まりてわかれてあれとみる村の老人の郷を出
ひ士女なりみづからかしこに疑徳をふくかくし
うしきもの門中ち観音をよみまつるまでに市に行

夕陽寅丑に和して孫過操更のひゞきあふにそ
びき初月わろきの雲にまよひやひてくらんとん
来迎のしきりひれ彩時ふ刀とぬき頭にきる
に一んふくらんとんと念もぞその時三所にとれ
今く頭にいつてさがりけはくれんと番。
刀とうへ二刀きれども九所に折て教速が頭手痛
ある有司これをみて大臣にかしきて大臣帝主
にまうしき帝主勅宣ありてつるにゆるさる是
より天下にゐく教速にはて流布をもらしに
教速奥義とうたものなりみせ棒ぶしうつとかく
く清信に行なむ菩と見るにぞその法躍に二三

の広がわら教速又神とは非にけんぐん怪い為のことし。
聞けのんいよく法義とせり弘誓ころけるぞ。
寿福いりしむるさまざまくりぐ一不遊船わく
たまれは宍大蔵菜即時ふきりそくあしげぞえん
や当来の勝利をやたとひ銅火のそこつりはむ
せぶも法為そくひずわろくそ。紅蓮乃氷
までうとも慈日でらしてさむらくもぞ信をと
あらしそけとぐへしとそく
善知識のささめにいりて往生とそぐるま
和云花洛に通去にわる夫でらの女房乃世に捨
らきそまるわりやさひとうけて沈ける時に善知

藏のひしりは会伝とをくめけりとひ病ゐ脚しつろ
奏じわそれ為ゐ宗きわりぞ名知藏わやしん
でうるるの清月よ月へ弱へ伝そとらへいたそ
ちしげるそのたり史車と将来くわるりと
参聖のいやそれとあるのちしめ分け弱会
るるそ伝の弱とつしく会じて名等
ぞとしうしじるへたまへ逆けへたも名知
藏よわへくそのまくめしのく会伝それば極
楽しまうもやうもていちんやさかのつこいもは
くりたなりとぞ弱へるるひて変
とわげて唱ぞしくわりてその宗ゑるとり

てしるもべるわりさ面わるるり聖又見ととるよ
くるて云史車もうせ紅むの塔婆も撰り羅
網かざるもるる車よぞ天女多くく楽音楽伝奏し
てひるひよきるまりとい聖り云楽んと芸え
奏るもぞの伝そべ弱へ伝と会じたり仏り
むるひよわべるんと思ひそるるんとそるぬ見よ
るひく社会仏もそ又るべくわりて云む車た
うせてぞ楽の変ぞそる僧のそりとげるるぞい
一人まりてぞいいべせ弱へ彼べを素るみりも
るるぬ宙也我しわひくるるべをんと云とくるひ
しるの云その僧ぞ極めくく異見せんとわべを

ぶ極楽へまいらまほしからんハへ参らるゝぞ。仏の照
願に乗じてたゞ一念のこゝろにいくらかなれば
そうしぬるゆへに念仏をもしてひとりまゐらんと
かがせともくむずかしくおもひて僧も見えんぞ。
人もなし、とかく其のひとつにてとくまゐらんと
といふべく思ひて念仏しけるとき、ゆめみて極楽
仏又六十万けいりしき。声のうちにいき絶けるに。
時に紫雲天に満、異香室に薫ぜり。金色の
弥陀ひかりをはなち、珠玉玄宮音楽ありて
めでたきん種々のてらやかに障碍を成わく道
にゆきさんとおもひけるなり。家に知りて一心讃仰まされ

ば獄卒罪杖を振十念成就されしハ瞿曇蓮座を
うけさせてこれかふるなどにひとへに是お紀識乃を
まちけるうや　若人五逆罪　得聞六字名
火車自然去　花台即来迎と見へたる也

尸毘大王鳩にかへり給ふ事

抑天竺に尸毘大王おはしまし。檀波羅蜜の行を修し
遍満瓔珞の位とおほせられて猶目蓮駿馬ばかりしけるに。
一日弟釈天まいりてきて鷹肉足を施与
したまふ時大王金屋の巌之に居し瑠璃釜の
ちりかからでなにひとりかりしきにへ降り鳩を
いがるなかくふところにへおやしとかりめ

と鶴一羽をとりて。鳴とうんで食んとしぬる時
の和をうんるとあられみて。我帝まるるとなんで来
いそでうかれとそをとりけざうんやといひけ出ぶ鶴の云
け鳴我今日の食よわるとうるとられとそをけて
いかうんて和をへじかりの食とそをものいては。
鳴とそをけんる雑と云こと一戸異を我股の
肉と割て鳴のかりよかし殺かさと成鳴
られとうりて。稗ふけ雑主とさざしろ一鳴れも
うて肉かろしまあの股れ肉成とれぞなる成雑
しそをは大をた右れ大に右一投られて。趣の伸と稗
よかりの殺よ。法天鳴義し殺一投よや。解脱

そうよ。ゆえ音楽坂一ひぐき通弟平安ち
てむ祈そうふけくうるうさ戸異をのらうと
ん人たあ。天帝稗を化鶴とるう異鶴偈
摩を鳴ふ変して来る地を檀波羅密の満と云
山所延好が立山よく元女云伝とる事
和云中法波羅延好といの山所雑中の立山のかる。
一和山ようぎん。世の別とうり新でくるん
そうてのうを法勢わら。延好わやうて法ん
でとうぞのびわんぬ宗一気をくうて云
我を平れ京七条西洞院東面の小乃猪車門
の家乃しとあるり文母兄弟みかいきわら我

くいかりうつくしくして命とうるのり罪業源
けいせいぶ山の地獄より脱はるる我生をおよんの
さうそう。祇陀林寺の地獄猛火の苦と二度をうる故
より。地獄我苦よりうつくしくして世界のそらかの苦根熱
て焼をびさの地獄よりいまは三度屋三度れ苦患と
うくるなり。ようい猛火むをびもぐるる炭地の
ぐ。二ぬは細の山とのかりりるる骨肉みる徹
ぬをて。ようい畏まくぐとうるる撩のうをて三百
六十四地獄三の内より二度の聴堂よりくく二の苦況
いちぐうそりたるのくうけ孫より大悪大悪
の祈を祈りよ業してけ業はの苦果と脱しうり。

責畏より杖撞せらるるのぐれで。搭骨と
徹て苦痛そうえぐうし我生そうし。朝より寒
鏡よりして。宮殿とるるぐ。禅堂と極
て安蒙と苦をうそ乃鏡いまぐ大石のくふ
ありそれそうて地獄かるりとくくてのの
苦とそそけしと父母よつげて子を面りひへぐ
せくよ思とかうじまんと。延好されとうて。
われふ思ひてその旨と祈掌しぬ我源文よと
うんで獄卒そうちよ来くぐの女とまぐり剣
の枝よりけて鉄杖とりくるる。三百六十四枝又
鉄よう思とのよ。六根離乱せりよかうとみ

じ獄卒紙よりうすわづらひその中よりぐさ
わりまうす。天ふしも悪辱苦悩はげしくとくべ
さきまうす。又刀山劍樹の如くいぶざうがさの摺巖
三昧のけもそぐこと稀なり。代苦の血とるべし。
とくに地獄苦の等活地獄の種とうそくひく受苦の
飛んとうすけおびせう移つの業まつりて。
天ふも宝業の苦生より代と云う。實ろうるとた
けとく思ひ下四のほみちのたちわくされども。
苦落へてひ子細とのの父母ようけまいが家中
の者どもるげさくるのしむるくぎりるのやがて二尺
ろちざうかさけどつらう。浄土の三部経とくさて常

能しかるんとうそうそんて幸子院みてくやうさて。
導師を大原の静源法養るり。一音三尋の説法
を四摂禅室乃花ひらけ四年弘誓の網い天令法
界の月と薫ぎらそのの秋大原れ貴よりのさきの業
雲乃よのけ水日午乃時に我いもぐらくさ生
作る地獄の人とるるぐ等しまるへ
とつげてみとさてそびくるとるるあせ。
さうけとけまとくく

元食沙門の事

梵曰むう指戒乃沙門わう郷に有て元食とる
わくとむ遣人れ家よゆきをう家をむつとり盃

立ちたる時よく鬱しくて寄るとかけるぶひ珠をとりて
くひつくむつくりくりくりぷり蛇てむと思ふるまのし元食
山門の僧くりみやとうくぶひてぷひと貴山門
鬱のくりくりくりといへぶぷとうんとて寄るとろろ
もんけまぶぷくりよわりつるものぷむつくりいくく
いりてぷひとせめくりぷけるかぶてその金樋めけ
て寄のくりくりわくりぬ寄ふくくてくりまちよ
死とぷ寄るくりぷ寄死とりてのちぷのびくくむ
うひてとひけりぷまくくりんと云みかひ忘ちく
立ちりぷきくん寄るわるくくくりきとりひけまぶぷ
時くりのむとい鬱れのくりくりいぷ郎寄の樋と

わけて見るくりぷひむわりもり賞くむひくりつくく
のくぷ山門とくくぶけてぷむと責くるりのくく
愛の戒慨悔しぷ寄と減しぷ苦くまて惑ぷけし
理ぷ澄くて賊絡のぷひるを草繋を樋くり脱ぷ食の
山門を鬱樋死ぷくわくくりけいひ故也
寄くとくりる安関まくくくくりる
漢云斎の関まを郭くくいくくを樋くぷ寄
樋くくくりるまでぷくく見られくくくくりる
寄くくくくりる頭ふ大くる痛わる安名と宿痛くいく者
わり寄ぷくりけりぷかくくくりすくして汐寄と
見くで寄くと猟くくくりくのでくぷ関まられくとくして。

問云寡人あてわそぶ若しこれも母うさも我と月
ゆゑ物つく一さをびしもゆゑ母うへ云
豪父母のとしへは奇とうまし云ものそく大まと
見よしいつこと教もでしやもで大まの云もれ寄
物のりかしきるのや宿痛わるる。女れ云中心伝で
宿痛のいつこうゆゑんを大まこうこびて伝車と
命じてもれと載て。母のやさく父母内まわりもう
もこれもう大まと云こうぐ。見もうと女りと
いもんを見とさて大まもぢて使とうして黄
金百枚とうて見と稱父母ゆどうきわそ伝
衣裳と洗濯して新衣とくうんとかりて。母

のいつこく我くのごとくまと月へそそもつるさ
らと服と言ものいうぐまと識と月をびっ
父母感涙して涙ぐれ。のてりこのしく使
もんと見。まつわと立て后ととて。住地服伝裳会
とうるひ。婦徳兼巧人民と稱そうおれとりく
賢徳と伝傳もれと朝もうの女死して伝意つる
と裳と屠ととて
延暦寺章忠伝開利法生の事
和云延暦寺東塔ゆ章忠伝ぐやとて
とさんわりさむ。のぐし。さくして。
法の晩学とうへ伝。雲収てわて。門伝

明耀とうくやうぼう法花とぐくこめもちる
二万余部。如法写経一百余部　業績観法
月久しくうりさ。養和元年中に月吉十禅師の社に
さんろうまうりけり。或和の義に云ふ僧も代
にて寶殿の内に入庫と同じて仏さまうり。
春やんのこさくがやうよわりはしるべ。
うんぞ我に福系とわるべうまつわざわ。僧の云
ぬを順次ぼけまもて今さんをうの福とゆうべ
かのしるべ。濁世に貪著して出離のさ所たげわ
るべきをりとぞ作しまけり。章忠ゆめそちま
ちまさめくうん世のせさわべをされば世わこの

入べとをとめ弱の和光童廉のけ云ふとした
まふ仏とをうくぞ邪見とおこす。邪明比根やす
るいやまもるにわくもやそ法章忠の弟別
延興寺と云ふに閑居をとめてひとへに念仏三
昧をぶりとうぞやう浄土れ業と演しけるが。
春秋の極め建久六年四月上旬にやまのひとうく
法僧に告て云ふ廿七日にうぞやうきをして
時来臨あるべしいひけ
にのぞうてわつまりひけまいどのくうりう彩
ちう。如法経の紙衣とをえしに章忠多年ちそら
役業れ彩まりとのくうきくふのの人に告て端

坐合掌して念仏をとなへさ絶えぬ。
比丘の僧教化なく檀那地道にかゝつらふ
様曰むかし一人の僧あり交易売買のために船
にのりて海にうかぶ。西に悪風起りて東面に
白浪ひるがへし船をそこなはんやうくうみに沈
そこにはさき入んとせし時にかぢが海底へみえつ
一人の僧人あり海は詩人ぞとしは僧ありしへなる
ち。我は是龍神なり海が船をとくのがへしとのむ。
悲しのいたく佛のゆへおいて寿を縮ぢや。龍の云
それは役船の比丘は我むかしの比丘の僧也我家に
わらし時つきて衛飯をくやうし丈ぢくりとかいへりで
我を教化せず責させずしてたゞいのちをつなぐに罪業を作せ
しめたりき。今我此処におちて一日に三度の
刀剣となりて身命を切らるゝなり。これ僧の科也。
檀那は布施をしけざるその師の罪あるによりて罪を
うくることなし。悲しき哉。そもそも我が此身をうけ
て三熱の苦をうくる事は生前の罪によつてなり。自
業自得の苦悩なれば今さら悔むべき事なし。さんげして
三宝に帰し佛法に帰せば悪念をとゞめて利益
後を救せ給へ。是ゆゑに浮報あるべしとも未来に於て
三途八難を遁れん事は只六道四生を宿とせ
ぬ海にとゞまるといへば、龍神の云我もとても苦

とまりの朝のしかの俗又我豊とたをけん分後
のさうへい命とうぞひて俗とおふ者ゆうこ
ーとのつ又桓武のひけるいにしへ一日一和まち弱
へ[illegible]てぴ俗ー法呪と論をーめて法式
説をんぢう者くとをこのんとりの即面で法花と論
をろよ。俗匂ふ地ゆと雑天ーー生じうとや
る者め将ろんをいまうじやう乃事
和云村上天皇ゆ法宮言葉おゆとやしい九条右恵
相師嘱光八の息ゆ母を姫喜乃帝の姫文雅子の
内親王ーーく時乃法門ゆ孫ーてぞのりけるをー
戈義世ふをうんく朝家の貴とも拾ーしくゆう

宮りをうれれば世のをうのさとをさとう堅固の道
んゆをうりけるーや
くけうを廣ぐくん西ら世年ー浦山貴も法
月ゆるとを孫ーて遊和云年十二月五日ふ立おて法
廣山横川の色ー年来をうをりをさ聖わう
けくとそをつひゆをさ出家ーて法名と和尚をとゆう
法ーー大和国ゆ長岳寺ーー法名と和尚をとゆう
紫竜隠棲ふーて番鑑ふ雨日類ーー松尾寺
ゆくーてぞんげの風ををりーーわつぐ巌峰の
花いおりひうをろみーて法国のひーーの色ー同し
うをぞ深洞の月いりげををてなづく槻門ゆわうを

のひらまるものりぞこ一四方なるりけりんぶがのの
ぶねさぐりとたゝぎでしてそ塩とそぞりけりの社
よ。意春のなりみぐ神ゝ杉ゝ穂敬のうゝ八幡城
ちぐぐりんとんのはたうぶんとそぞりつぶ浦瀬
寄ゝうぐりまうでぶ将のたゝ秋ゝたゝしめ
ぶんぐんといゝてゝ祈ゝ七日ゝ満じ
りけり秋。二堂の運命とたけぶぞらたみて
春さりぬ。西願大聖一つうぞるゝとうちびて。
ぶりけり社ゝぞるゝを川と倉橋川のおち合ゝ海
合と云所おもゝたゝこのわりけりゝ扇のぐれが
つゝうとみまぐぶの扇也ぐりんとんれは祈

まゝやゝ思ひ絶りけりゝ相りゝたゝ。
倉橋川とたりゝたゝのゆきぶゝ社ゝ多義峯
の糸の大門へゆきぶゝ内宮女人へぬゝの
ぐ。乳ゝたゝ作りたる者寺中ゝりたゝりける
ゝつのゝりゝめわひのりけりいぶんぐ
ゝたゝ思ひゝ過てゝりけりたゝ義の中貌
糸ぶりの世の物語い中ゝたけとぶゝ思ひと
も寄たゝゝたゝ作られぶりいたゝ今ゝ
とたゝ世ぶのまでゝたゝりぶのゝ。たゝ作み
ちゝ入てなぐゝたるれぬ浄土の衣とぬんるゝとゝ
めたゝゝ入とりけりぶの世界も安家して祇の石

して、康保四年八月十六日巳の刻ばかりに紫雲
天に浮び美香地に薫じ、うんぜう正念にして、
ようじゃうせりに将入道、こんぜんの観の行者にて、
ちくこの松根にたをれ、種々の奇瑞と現じ、往生
をとげぬ。行ぎょうの力、その居所に常
住の菩提場と定まりぬめり。夫蓮花とそ西のりけうの
くりんとんの二聖、蓮花とそ西のりけうの夫蓮
華は十界を為乃浄刹にして、さ蓮の
やうにて、そこの利生引
波羅奈国の法花国果のごんざる事
梵国むりー波羅奈国に新宮東の三学道場
に意の三業を通じ、法門わり、紹の国師
四海の傍機そう、代々の明主、ひるのごく昼夜とい
せこの間、間こくそ過ぬ。つくり、行ぎょう、大乗相
応のごとくにゆへ、業国の中に出へ。
ゆへ、金屋の下ふ、酒をとりかう河法会といとなの
をこるわれくぞ、法花の導師にひいつと信なり。
勅命にたこうひ、陽明にえまで、大王かりふ、碁
とうちそもそも初へ、碁をいつさん、そのうーゆけ
ふくとみーど、碁にはくん入て碁のまーこれと作
きけりと、信碁そこ、まりてそこれとちくぢわ
う也とんはて、禁門の加へおーすくちくびと加ーけ

つ。帝その法師をめしてそうし。典獄の官初宮に
たてまつりて。貢とたてまつりけるとし。奏聞をと
くに。とのたまはせさせたまひそ。奏聞をと
ゝ。そうしたまふ。一云の下にわやまりとはたるべく。
勝がに感とわらはたるいぶ大逆の法なりや
いらせたまへども。かひなしとぞ。
ゝ。そひ法ならん七日の日宮に。宿命通とは
てゞの思惟とゝ。ひ法のの帝に新泥と業
とまる田文也。帝の帝に水ゝまむ蛭ゝそわり
きそその田文也。荒が田と新しける時おやまりく
鋤のさたゝくゝ切そうし法ゝ田文いかのゆつとなれ

蛭い法師たゞ国の大きとうまれうりの国果ゝ
ゆくものしくひと感ざそと奏しそうぞ法帝ゝ
く教生と林ふ新わりそいとゝく

和列行器貪者注生分商麻暑茶産の事

和云大和国行器の郷ゝ貪者わり同国の天川ゝ
舞文天ゝ日きうでして現世の福者とでいのりける。
きでふ安余ゝ食とうきぬゝいへども化験ありけり。
ある附又きうで通和しゝける。今生の事いかるゝ
ゝまでさのゝのゝくゝさんけのゝくゝゝく法世がゞ
いとそうとけさせそうまへと祈んゝゝ祈請して孫
そうる器ゝ神願の法戸開て法ゝふ物ゝる者世

て母稲命のさきのあるらぬゆへ今まで世のうちにかくなかか
ふへりしに此ほどかくいはそのへにてくもかんゐなれど
て此ところく新に披きして嘆をふくるを旅ては
世の事にも當麻寺の蓮心房にまかせしとたのみさるを當麻
とらつく萬のさまかりをすまりかのつけりりて當麻
寺へおさくそくぽり寺の称池を見そきるるに鷺池の
しそかいる開しの鷲山の峯のほりましとるきてむくりさく
蓮心房とそぶでけせいおくろんゆきさわのてそをづある
るの子細をとゐくく指しけるいいし寺りは蓮心と云人
おかし當麻寺の曼陀羅のはるものすりやそのほかはりの
曼陀羅とれもていはふ良乃帝の横佩右大臣豊

成公の御むすめの中将姫しもしへ継母のざんわらく
のかまそそうまめのしそに當麻寺に顕れて落餝も
肌く仏生浄土の心願を修し玉ひし西方極楽の
阿弥陀如来を化身をかりりくうんとる機婦と現して蓮
糸をわつかくぽくらく浄土の変相を織りかし
給へ給むる御かりのゆへ今その時化女は機婦女房
と勝りて化形りりそうへの望をうけまへり
されば蓮心とは蓮の糸なる人房はそきの儀なり
されは此曼陀羅を新清して世をとくすけなれ
とあさる夢たる人ちかきこれのありしも當山
宗旨の旅の内に對する守護重しと云しもの此

まで月ぎやうでしけるが、よそへゆくとてのち仏恩ある
いざりけるに僧思ひけるに紅林は室之事目にもは
まてども来ざりしかば其ちは詞にてしかりけるかへしその中のさい
このよしをかくて僧職の通夜しける物かたりける
僧出て雲海さんけいの時毎夜我まよひの霧
ときうつりしかり我は毎日牛の時に當麻の曼陀
羅へ参るも也けまいりいたりては當麻寺へさんけいせ
へし我かくごしたる六十余州の大小の神社も牛の
時よまいりて後我にも来し給ひて神々の後にてまいりて當麻へ
月まうでしけるがかうしやうの其懐と成けるが時
紫雲来り音楽聞光地に映じければ往生の端相

せりとぞ前段のごとくしおれとありて見とて曼陀
羅の此事あるへしとおもひければ信伏してかへりて
それより曼荼羅は回まうでしけらくの性清と祈
やけるがかの心く死期と見りてすなはち元念に端坐
合掌して往じやうしけるが時當麻寺より異
香さしきたりて不思議なれとぞ

新選沙石集第五終

皇都 書林
寺町通五条上ル町
藤屋武兵衛板